

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 29 日

機関番号：32682

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320073

研究課題名（和文）クレオール化する地域文化の比較研究—オセアニアからアジアまで

研究課題名（英文）A Comparative Study of Creolized Cultures: From Oceania to Asia

研究代表者

管 啓次郎 (SUGA KEIJIRO)

明治大学・理工学部・教授

研究者番号：00328965

研究成果の概要（和文）：

本研究の到達目標は、各地域の分析を通じ、批評的視座としての「クレオール化」の有効性を確認する、というものであった。そのため、この「クレオール化」を含む、ポストコロニアリズム理論全般の見直しを行った我々は、結果として、西欧諸国のみならず、アジア、ラテンアメリカ、およびオセアニア諸地域の映画、小説、写真、ポピュラーソングの新たな読解の可能性を見出すことに成功した。また、最終年度に発表された『混成世界のポルトラーノ』（2011年）は、一般向けに記述された、社会科学的知見に基づく批評的紀行文・詩の実践である。これにより、本研究がその有効性を確認してきた「クレオール化」という概念は、一批評のツールとしてのみならず、「クリエイティブ・ライティング」の分野の発展に貢献することが明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：

The goal of our research is to confirm the efficiency and effectiveness with the critical term “creolization” through the analysis of different local cultures around the globe. By conducting a thorough review of postcolonial theories including “creolization,” we succeeded to provide alternative possibilities for rereading films, novels, photography, and popular songs created not only in western countries but also in Asia, Latin America, and Oceanian region. Especially, the publication of *Konseisekai-no-Portolano* (2011) is one of our significant accomplishments. This collection of critical travelogues, based on the social scientific knowledge, proves the efficiency and effectiveness with “creolization” in developing literary criticism as well as expanding the capability of creative writing.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2010年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2011年度	2,400,000	720,000	3,120,000
総計	8,000,000	2,400,000	10,400,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：

(1) 比較文学 (2) 文化人類学 (3) 英米文学 (4) 外国文学 (5) 中国文学

1. 研究開始当初の背景

アメリカの複数形である「アメリカス」のうちでも、「プランテーション・アメリカ」と呼ぶべき地帯、すなわちアメリカ合衆国南部からカリブ海域、そしてブラジルにかけての諸地域では、多くのアフリカ系奴隷の移入の痕跡が「アフロ・クレオルのなもの」として、生活文化から言語・音楽・造形芸術・舞踊など、およそあらゆる側面の文化創造に、その基本的語彙と活力を提供してきた。その中から生まれた文化混淆の思想が、フランス語圏マルチニック出身の作家・思想家エドゥアール・グリッサンの言う「クレオリザション」（クレオール化）の概念である。当研究グループの研究代表者・管啓次郎は、『コヨーテ読書』（青土社 2003 年）、『オムニフォン』（岩波書店、2005 年）『ホノルル、ブラジル』（インスクリプト、2006 年）といった著書のなかで、この「クレオール」のもつ可能性を「世界」という認識枠の読み替えに採用し、ポストコロニアリズムを超えた地点に浮かび上がる「現在性」を探ってきたが、クレオール化の思想的可能性をより多くの地域文化において検証するため、カリブ海地域や南米、あるいは北米やフランス内部でのクレオール化はもとより、「プランテーション・アメリカ」に限定されない諸地域、すなわち台湾、沖縄、オセアニアを新たな研究対象として設定し、より総合的な研究に着手する必要性が生じてきた。

また、欧米アカデミズムではすでに一般的なとなったポストコロニアリズム批評も、21世紀に入り、たとえばガヤトリ・スピヴァックやワイ・チー・ディモックといったポストコロニアル的主体を生きる批評家によって、あらためてその批評的限界を乗り越えられようとしている。彼女たちが提唱する「惑星志向の文学」などもまた、グローバリズム以降の環境論的視点を取り入れた、あらたな世界文学構築を目指すものとして注目に値する。

このような中で、台湾や沖縄におけるポストコロニアリズム批評は、まだその端緒にいたばかりであり、すでに新世代アーティストたちが作品におけるコロニアルな表象を意図的に相対化しはじめているにもかかわらず、彼らを論じる日本内部の言説空間はいささか閉鎖的なものとなっていた。すなわち、このような欧米のある意味で進みすぎた批評言説と、日本およびアジア諸国における閉鎖的な言説空間を接続し、真に地球規模での新しい文化活動を評価するためにも、「クレオール化」という思想の可能性を押し進め、ローカルとグローバルのあいだの越えがたい認識論的格差を受け入れながらも、なおのこと「世界」を思考しようとする新たな越境的比較地域文化論の研究モデルを提示の急務

となっていた。

2. 研究の目的

文化混淆、特にヨーロッパ系文化の進出による地域文化の変容が、良くも悪くも現在の世界文化の基層をなしていることは疑い得ない事実である。なかでも、グリッサンの提唱する「クレオール化」の概念は、カリブ海文化を大きな文明史的な遭遇の産物と捉え、そのダイナミズムを強く肯定し、世界文化の現在に対する視野を開くものだった。ある地域における文化混淆の思想をもとに、地球各地においてその「同型性」を見出し、さらにはそれらの呼応関係の発見から新たな刺激を汲み取ろうとするグリッサンの態度は、グローバリゼーションが浸透した現在の地域文化を研究する上でますます重要性を増していると言えよう。本研究は、カリブ海文化はもとより、南米、北米、カナダ、台湾、沖縄、オセアニアといった諸地域における文化混淆の在り方とその可能性を、欧米文化内部で育まれた新世代による文化活動との比較に基づき検証することで、グローバリズム以後のポストコロニアル的状況下における新たな越境的比較地域文化論の確立を目的とする。

3. 研究の方法

東アジアを担当する林ひふみ（筆名・新井一二三）は、台湾で出版された中国語による著書『偽東京』（大田出版、2008年）などで展開した比較文化論的視座を応用し、両世界大戦を中心とする日本と東アジア諸国のあいだのコロニアリズム／ポストコロニアリズム的文化状況を再検討する。このとき、論文『「白色恐怖」成了『後現代』？——台湾人的歴史観』（『九十年代月刊』1996年4月号）などで常に林が注目してきた「台湾」という地域こそは、本研究の核となっていく。本年度はフィールドワークとして、台北、台南、高雄、恒春半島（車城、恒春、満州、墾丁）などの諸地域を調査し、次年度以降の監督インタビューなどのための基礎資料を蒐集する。対象となる監督は魏聖徳であり、同監督の『海角七号』、『賽徳克・芭萊』といった作品を中心に、広く台湾および中国の映像・文字資料を分析する。

同じく東アジアを担当する倉石信乃は、現在のアジア的ポストコロニアリズムの一例として、「沖縄」をめぐる表象行為の現在を代表する照屋勇賢ら沖縄出身者／関係者による近年の美術・映像を分析する。そのため、倉石のフィールドワークは、照屋らの活動成果が今年度においてももっとも端的にもあらわれている拠点（沖縄、北海道、アメリカ）を対象とする。

オセアニア地域を担当する管啓次郎は、

「パン・ポリネシア文化」の拠点となる、ニュージーランド（アオテアロア）最大の都市オークランド（ターマキ・マカウラウ）およびサモア独立国（アピア）のフィールドワークを行い、背景を異にしたポリネシア系住民たちの混住と彼らがさらされる文化変容の中から産み落とされた活気のある文化シーンを分析する。そして、カリブ海におけるクレオール化の概念を背景として、現代ポリネシア各地の文学・音楽・舞踊・美術の変容する現況をフィールドワークによりとりあげ、ポストコロニアル世界文化が抱える問題を素描し、他地域との有機的な連結可能性を明らかにする。

フランス語圏の文化を担当する清岡智比古は、自身のシュルレアリスム研究を基礎として、本年度はカナダのフランス語圏における現代クレオール文化の一例を分析する。研究対象は、コルネイユ（Corneille）などの文化混濁的アーティストおよびシルク・デュ・ソレイユを代表とする多国籍アートサーカスであり、そのフィールドワークとして、本年度はカナダのモントリオールに赴く。

南北アメリカ文化を担当する波戸岡景太は、ジャズ、ブルース、ソウルといった黒人音楽文化を継承してきたヒップホップ・ミュージックにジャック・ケルアック、アレン・ギンズバーグといったビート世代の影響をみることで、例えばエミネムのライムにおけるメタフィクション性を、黒人文化と白人文化のクロスオーバーする地点に設定する。その上で、フィリピン系のメンバーを含むブラック・アイド・ピース、あるいはハイチの状況を北米の音楽シーンに接続するワイクリフ・ジョンなど「クレオール・ヒップホップ」までの見取り図を描く。

4. 研究成果

ヨーロッパ系文化の進出による地域文化の変容が、いかに「現代」の世界文化の基層をなしているかを考察する本プロジェクトは、なかでも、「クレオール化」の概念を、オセアニアからアジアまでの各地域文化研究に援用することで、大きくはポストコロニアルizm批評の概念自体を更新することに成功した。

東アジア地域については、主に台湾映画に見られる、多数者母語と少数者言語の新たな関係図の分析を出発点とし、日・中・台の「現在」をクレオール化という観点から理解することを可能にした。

また、同地域の沖縄研究に関しては、写真に表現された沖縄を分析の中心に、写真家とキュレーターとの相互交渉から生み出される沖縄表象の意義を明確にした。

オセアニア地域に関しては、「パン・ポリネシア文化」の諸相をフィールドワークによ

って蒐集・分析し、文字テキストとしては表象されない文化形態をテキスト化することに成功した。

フランス語圏地域については、映像表現にみられる「移民」の存在に着目することで、パリおよびモントリオールという「都市」の表象に、前世紀と今世紀のあいだで大きな断絶が生じていることを発見した。

南北アメリカ地域については、1970年代のポストモダニズム的思考実験と、1980年代以降のミニマリズム的文学実践のはざまに胚胎した、極度のローカリズムとグローバルイズムの融合としてのヒップホップ文化に着目し、人種混濁とそれへの反発が、いかに現代のクレオール化を独特なものにしているかを明らかにした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 19 件）

2009 年度

新井一二三(林ひふみ、以下同):「恒春/長春」中国:遼寧教育出版社『万象 12 卷 14 号』. 125-143. (2010)

新井一二三:「南台湾反思(上)」中国:遼寧教育出版社『万象 12 卷 16 号』91-110. (2010)

林ひふみ:「台湾映画『海角七号』を読み解く」『明治大学教養論集 452』. 79-119 (2010)

2010 年度

新井一二三:「南台湾反思(二)」中国:遼寧教育出版社『万象 12 卷 8 号』. 76-87 (2010)

新井一二三:「南台湾反思(三)」中国:遼寧教育出版社『万象 12 卷 9 号』77-83 (2010)

新井一二三:「南台湾反思(四)」中国:遼寧教育出版社『万象 12 卷 10 号』. 78-87 (2010)

新井一二三:「南台湾反思(五)」中国:遼寧教育出版社『万象 12 卷 12 号』. 83-94(2010)

新井一二三:「中華台北」中国:遼寧教育出版社『万象 13 卷 2 号』. 50-65 (2010)

新井一二三:「從『追捕』到『非誠勿擾』」中国:遼寧教育出版社『万象 13 卷 11 号』61-64 (2011)

新井一二三:「『客途秋恨』与『南京的基督』」中国:遼寧教育出版社『万象 13 卷 9 号』108-116 (2011)

倉石信乃「沖縄戦の写真、以前と以後」、明治大学人文科学研究所編・発行『明治大学公開講座XXX 沖縄と「戦世」の記憶』、121-159。(2011)

波戸岡景太「デトロイト・イズ・ビューティフル：ヒップホップ文化とアメリカ都市空間のクレオール性」『明治大学教養論集 468』、69-84。(2011)

2011 年度

清岡智比古：『イブラヒムおじさんとコーランの花たち』試論『明治大学教養論集 473』、43-62。(2011)

清岡智比古：『サンドイッチの年』試論『明治大学教養論集 479』、89-110。(2012)

清岡智比古「パリ 13 区——中国系ディアスポラの一局面」『明治大学教養論集 472』、51-92。(2012)

倉石信乃「島の開け」大友真志『GRACE ISLANDS—南大東島、北大東島』KULA、頁番号なし。(2011)

倉石信乃「孤島論」『photographers' gallery press no.10』photographers' gallery、79-94。(2011)

林ひふみ「台湾先住民映画としての『海角七号』(1)——映画史における「原住民」像の変遷」『明治大学教養論集 472』、33-62。(2012)

林ひふみ「台湾先住民映画としての『海角七号』(2)——牡丹社事件と虹の伝説」『明治大学教養論集 472』、63-90。(2012)

[学会発表] (計 1 件)

波戸岡景太「Fang を持つもの、持たざるもの——ピンチョン文学における〈野性〉の表象」日本アメリカ文学会第 50 回全国大会 (2011 年 10 月 9 日、関西大学千里山キャンパス)

[図書] (計 3 件)

管啓次郎、林ひふみ、清岡智比古、波戸岡景太、倉石信乃『混成世界のポルトラーノ』左右社、320 頁、(2012)

新井一二三 (林ひふみ)『台湾為何教我哭? (なぜ台湾は私を泣かせるのか?)』台北：大田出版有限公司、236 頁、(2011)

林ひふみ『中国・台湾・香港映画のなかの日本』明治大学出版会、290 頁、(2012)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

管 啓次郎 (明治大学・理工学部・教授)

研究者番号：00328965

(2) 研究分担者

林 ひふみ (明治大学・理工学部・准教授)

研究者番号：20514152

倉石 信乃 (明治大学・理工学部・准教授)

研究者番号：10459993

清岡 智比古 (明治大学・理工学部・准教授)

研究者番号：60514148

波戸岡 景太 (明治大学・理工学部・准教授)

研究者番号：90459991